

選択必修・選択：小児科

．概要と特徴

当科における卒後研修の目的は、主として小児患者の扱い方、プライマリーケアの要点及び小児患者の診察に必要な基本的知識と技術を習得すること。併せて人間性豊かな医師の育成を図ることである。

当科での研修の特徴は小児科全般について基本的診療を幅広く研修できることである。

当科での研修の基本方針は以下の通りである。

- 1．小児科全般についての基本的診療を幅広く研修する。
- 2．小児の特徴を理解し、基本に忠実な診療を心がける。
- 3．小児診療での基本的手技を身につける。

．医師リスト

研修指導責任者：小田 誠

指導医：工藤 雅庸

．指導体制

指導医のもとで主治医の一員として診療にあたる。

．研修カリキュラム

1．到達目標

G10：一般目標

小児科および小児科医の役割を理解し、小児医療を適切に行うために必要な基礎知識・技能・態度を修得する。

SBOs：行動目標

(1) 病児 - 家族(母親) - 医師関係

病児を全人的に理解し、病児・家族(母親)と良好な人間関係を確立する。

医師、病児・家族(母親)がともに納得できる医療を行うために、相互の理解を得る話し合いができる。

成人とは異なる子どもの不安、不満について配慮できる。

(2) チーム医療

医師、看護師、薬剤師、検査技師、医療相談士など、医療遂行に拘わ

る医療チームの構成員としての役割を理解し、幅広い職種他職員と協調し、医療・福祉・保健などに配慮した全人的な医療を実施することができる。

指導医や専門医・他科医に適切なコンサルテーションができる。

(3) 問題対応能力

病児の疾患を病態・生理学的側面、発達・発育の側面、疫学・社会的側面などから問題点を抽出し、その問題点を解決するための情報収集の方法を学び、その情報を評価し、当該病児への適応を判断できる。

指導医や専門医・他科医に病児の疾患の病態、問題点およびその解決法を提示でき、かつ討論して適切な問題対応ができる。

(4) 安全管理

医療現場における安全の考え方、医療事故、院内感染対策に積極的に取り組み、安全管理の方策を身につける。

小児科病棟は小児疾患の特性から院内感染の危険に曝されている。院内感染対策を理解し、特に小児病棟に特有の病棟感染症とその対策について理解し、対応できる。

(5) 外来実習

common disease の診かた、医療面接による家族（母親）とのコミュニケーションの取り方、対処方法を学ぶ。

外来の場面における母親の具体的な育児不安・育児不満の中から「育児支援」の方法を学ぶ。

(6) 救急医療

小児救急医療の種類、病児の診察方法、病態の把握、対処法を学ぶ。また、重症度に基づくトリアージの方法を学ぶ。

救急外来を訪れる病児と保護者（母親）に接しながら、母親の心配・不安はどこにあるのかを推察し、その解消方法を考え、実施する。

2. 研修内容

(1) 医療面接・指導

患者及びその養育者、主として母親と好ましい人間関係をつくり有用な病歴を得ることができる。

(2) 診察

小児の各年齢的特性を理解し、正しい手技による診察を行い、これを適切に記載し、整理できる。

全身を包括的に観察できる。

(3) 診断

小児の各年齢における成長・発達の特徴を理解し、これを評価できる。
患児の問題を正しく把握し、病歴、診察所見より必要な検査を選択して、得られた情報を総合して、適切に診断を下すことができる。

(4) 治療

指導医とともに患児の性・年齢・重症度に応じた適切な治療計画を立て、実行できる。

薬物療法については、薬剤の形態、投与経路、用法、用量を決定することができる。

(5) 診療技能

以下の項目について自ら実施できる。

身体計測、検温、血圧測定、注射（静脈、筋肉、皮下、皮肉）、採血（毛細管血、静脈血、動脈血）、導尿、胃管の挿入、静脈点滴、酸素吸入、蘇生（気道確保、人工呼吸、閉胸式心マッサージ）

以下の項目について指導医の指導のもとで実施できる。

腰椎穿刺、骨髄穿刺、輸血、交換輸血、気管内挿管、呼吸管理、経管栄養法、経静脈栄養

(6) 臨床検査

以下の検査について、その結果について解決できる。

尿一般検査、緊急検査（血液ガス分析、末梢血、血液生化学検査）、血液型判定、輸血のための交差試験

一般的検査について小児の年齢による変化を考慮した検査結果の解釈ができ、診療に応用できる。

(7) 画像診断

胸部、腹部、頭部、四肢のX線単純写真を診断する。

指導医とともに超音波検査（頭部、心臓、腹部など）を行い、その結果を解釈することができる。

指導医とともに小児に特徴のある消化管造影を実施し、その画像を読影できる。

指導医とともに静脈性腎盂造影を実施し、その画像を読影できる。

指導医あるいは専門医と相談して、CT、MRI、シンチグラフィを指示でき、その結果を理解し、診療に応用できる。

(8) 経験すべき症候・病態・疾患

一般症候

- 1) 体重増加不良、哺乳力低下
- 2) 発達の遅れ
- 3) 発熱

- 4) 脱水、浮腫
- 5) 黄疸
- 6) チアノーゼ
- 7) 貧血、紫斑、出血傾向
- 8) けいれん、意識障害
- 9) 咽頭痛、口腔内の痛み
- 10) 咳嗽・喘鳴、呼吸困難
- 11) 頸部腫瘤、リンパ節腫脹
- 12) 便秘、下痢、血便
- 13) 腹痛、嘔吐

重要な疾患、頻度の高い疾患

必ず経験すべき疾患

- 1) 小児けいれん性疾患
- 2) 小児ウイルス感染症

麻疹、流行性耳下腺炎、水痘、突発性発疹、インフルエンザ

- 3) 小児細菌感染症
- 4) 小児喘息
- 5) 先天性心疾患

経験することが望ましい疾患

- 1) 新生児・乳児疾患：低出生体重児、新生児黄疸、呼吸窮迫症候群、乳児湿疹、おむつかぶれ
- 2) 先天異常、染色体異常：ダウン症候群など
- 3) 腎疾患：ネフロゼ症候群、急性腎炎・慢性腎炎、尿路感染症
- 4) アレルギー疾患：アトピー性皮膚炎、蕁麻疹
- 5) 心疾患：川崎病心血管合併症、不整脈
- 6) 血液・悪性腫瘍：貧血、白血病、小児癌
- 7) 内分泌・代謝疾患：低身長、肥満、甲状腺機能低下症(クレチン症)
- 8) 発達障害・心身医学：精神運動発達遅滞、言葉の遅れ、学習障害・注意集中障害

3. 週間スケジュール

月曜日～金曜日まで午前外来診療、午後病棟回診